

# こんな場所に六三〇〇年前の集落があった

西田 茂

北海道埋蔵文化財センター

Key Word 縄文時代早期 集落 長都沼の水位 アイヌ語地名 カマカ

はじめに

私は平成七（一九九五）年から四年ほど、夏期に千歳市内で遺跡の発掘調査に従事していた。この発掘は、高速道路の建設工事に際しての事前発掘といわれるものであり、道路建設によって壊されてしまう埋蔵文化財の記録保存のためのものである。財団法人北海道埋蔵文化財センターは、千歳市内での北海道横断自動車道路建設に際して、平成五（一九九三）年、本格的な発掘調査に着手し、十年に野外での調査を終了した。さらに同十三年以降は、空港から横断道路へ接続する路線について発掘調査が始まり、千歳市内においては今なお大規模な発掘が繰り広げられている。

私は四年間のうち、はじめの二年をキウス地区で、残りの二年をユカンボシ地区で過ごした。結果的には、かつて存在したオサツ沼の東側、西側での発掘において、地形、地層について理解を深め、発掘作業ならではの知見を得ることができた（図・1）。

これらの発掘調査の成果を基にして、オサツ沼の形成に関して述べたことがある。その主旨は、「石狩低地帯南部（千歳市・恵庭市・長沼町）で一九六〇年代まで見られた広大な沼沢地の水位は、擦文文化期（一〇〇〇年前）以降の上昇によるものであり、標高八〜九mの高さまでが水浸しになるのは、アイヌ文化期になってからである」というものであった（西田茂



図-1 遺跡の位置 1：ユカンボシC1遺跡 2：ユカンボシC2遺跡  
3：ユカンボシC15遺跡 4：キウス4遺跡A地区  
（この図は、平成13（2001）年国土地理院発行の5万分の1地形図「恵庭」の一部である）

二〇〇六)。つまり、江戸時代以降の諸記録で広大な湿地として認識されていた沼沢地の形成、水位の上昇という出来事は、考古学的な時間尺度で見ると、きわめて新しい時期の現象であったということとを説明したのである。このときは水位の上昇が起った時期の確定に論を運ぶ必要があったので、長期にわたる縄文時代の水位（地形）に関しては、後期（四〇〇〇年前）以降の概略を記したに過ぎなかった。

本稿では、さきの論文で触れることがなかった縄文時代早期後葉（六三〇〇年前）の集落と水位のことを述べておく。さらに発掘調査で得心したアイヌ語地名「カマカ」についても紹介しておきたい。

#### 一・ユカンボシC2遺跡の集落

ユカンボシC2遺跡の発掘調査が行われたのは、平成五（一九九三）年である。長都地区では農耕地の土地改良事業に伴って農道の整備、排水溝の新設工事などが進展し、遺跡のなかに排水機場が建設されることになり、その工事範囲である東西四〇メートル、南北七〇メートルほどが発掘された。

大正九（一九二〇）年発行の五万分の一地図をみると、発掘したあたりは標高一〇メートルほどで、湿地帯の縁となっている（図・6）。発掘してみると耕作土の下には一七三九年降下の樽前a降下火山灰層が二〇センチほど堆積していた。この降下火山灰層の下は縄文時代早期の住居跡が検出される五〇〜九〇センチの深さまで、黒色土や黒褐色土であった。湿っぽい黒色土や黒褐色土の中ほどの位置に樽前c降下火山灰層があった。この縄文時代晩期後葉（二四五〇年前）に降下した樽前c降下火山灰層よりも上に泥炭層を想定させる「草本」部分が認められた。縄文時代早期のコッタロ式土器の時期の竪穴住居跡は、もちろん樽前c降下火山灰層よりも下から検出された（図・2）。

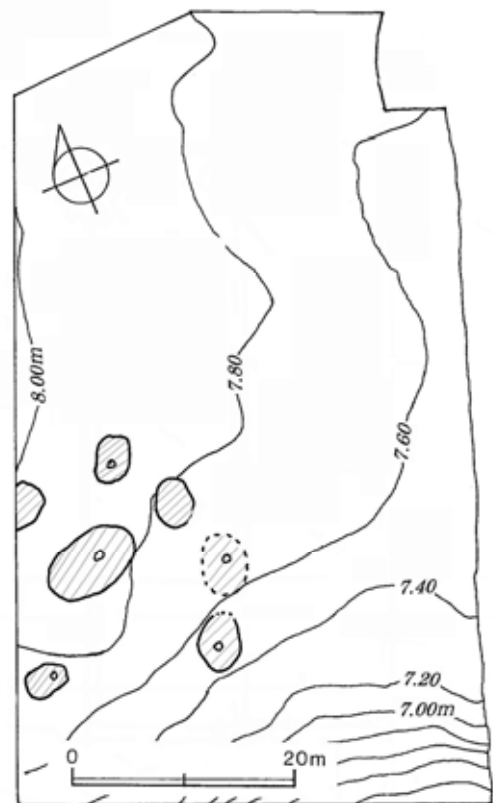


図-2 コッタロ式土器の時期の集落  
（ユカンボシC2遺跡）

通常、遺跡の発掘調査では、いろいろな時期の遺構・遺物が検出されるが、この図・2には竪穴住居跡七カ所のみを書き込んであり、竪穴住居跡はすべて標高八メートルよりも低い位置にある。これらの住居跡は、平面形は楕円形に近い形であり、その中央付近に焼土が認められる。考古学的な時期の決定は、それぞれの住居跡について、そこから出土した土器でもってなされる。それらの土器のうちでH・10と呼ばれる住居から出土したコッタロ式土器が図・4である。

コッタロ式土器は縄文時代早期後葉（六五〇〇年前）の時期に位置づけられるものであり、後述する中茶路式土器へと、連続して推移することは、遠藤香澄が指摘している（遠藤一九九七）。

#### 二・キウス4遺跡A地区の集落

キウス4遺跡は、東西一キロメートル、南北八〇〇メートルを上回る大きさの遺跡であ

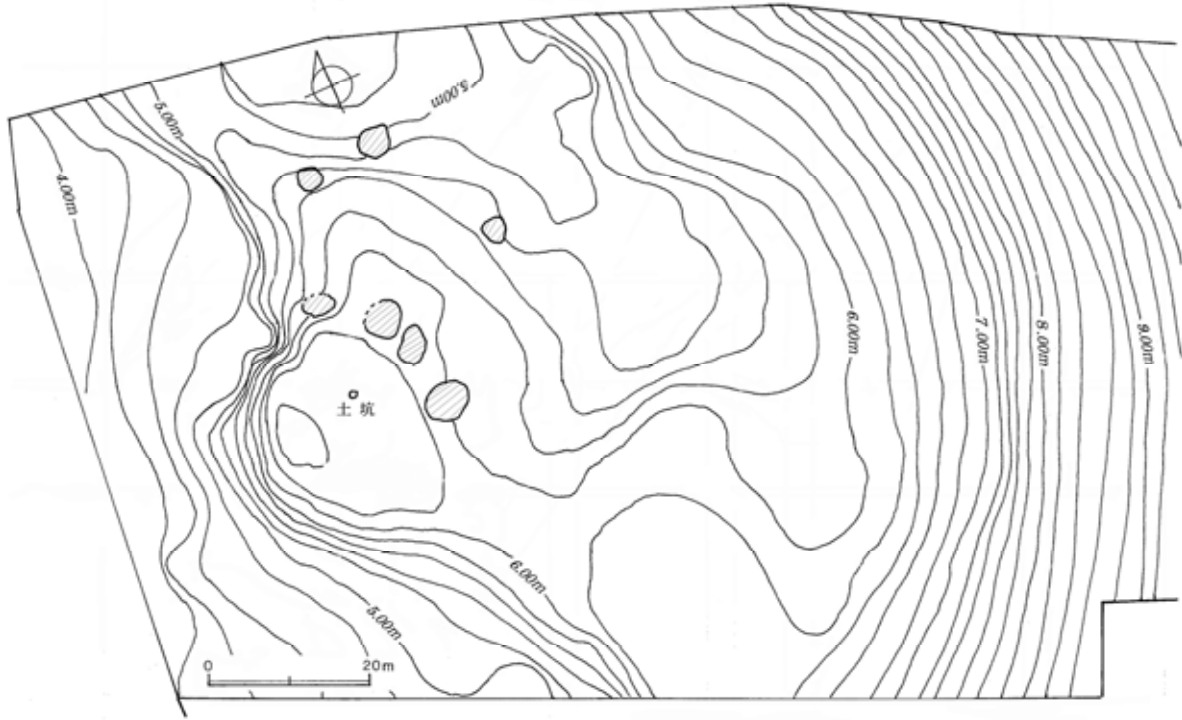


図-3 中茶路式土器の時期の集落（キウス4遺跡A地区）

る。この広い範囲はいくつかに区分されているが、そのもっとも西側のA地区の発掘が行われたのは、平成九（一九九七）年である。この標高六ヶ付近において中茶路式土器の時期の竪穴住居跡が検出された（図3）。この図には竪穴住居跡七カ所と土坑ひとつのみを示してある。竪穴住居跡の平面形は不整長円形であり、長さは数メートルの規模である。すべて厚さ二センチほどの泥炭層よりも下から見つかっている。この住居内には焼土はみられなかった。

これらの住居跡、土坑の時期は、出土した中茶路式土器によって、縄文時代早期後葉（六三〇〇年前）と判断される。図4（右）には、この土坑（ALP20）から出土した中茶路式土器を示した。中茶路式土器は、コッタロ式土器から漸移的に変化してきたものである。この図4に示した二個体の土器と比較すると、それぞれの特色は器形において認められる。底部からの立ち上がり部分の断面をみると、コ

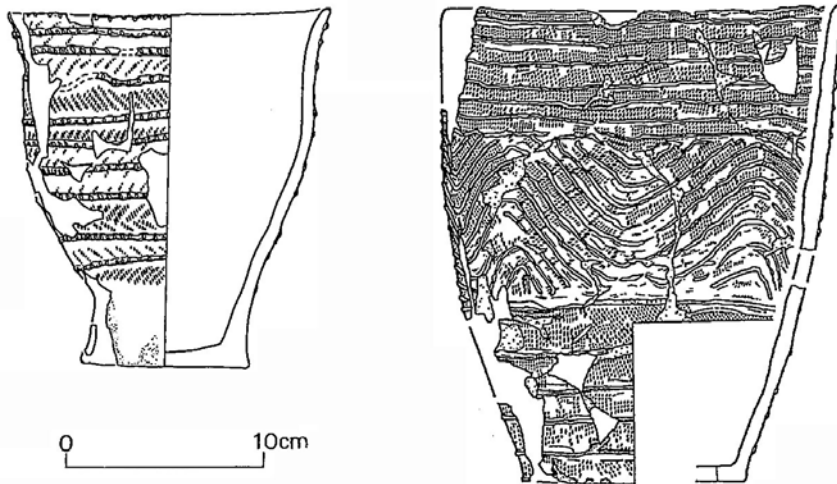


図-4 コッタロ式土器（左：ユカンボシC2遺跡）と中茶路式土器（右：キウス4遺跡A地区）

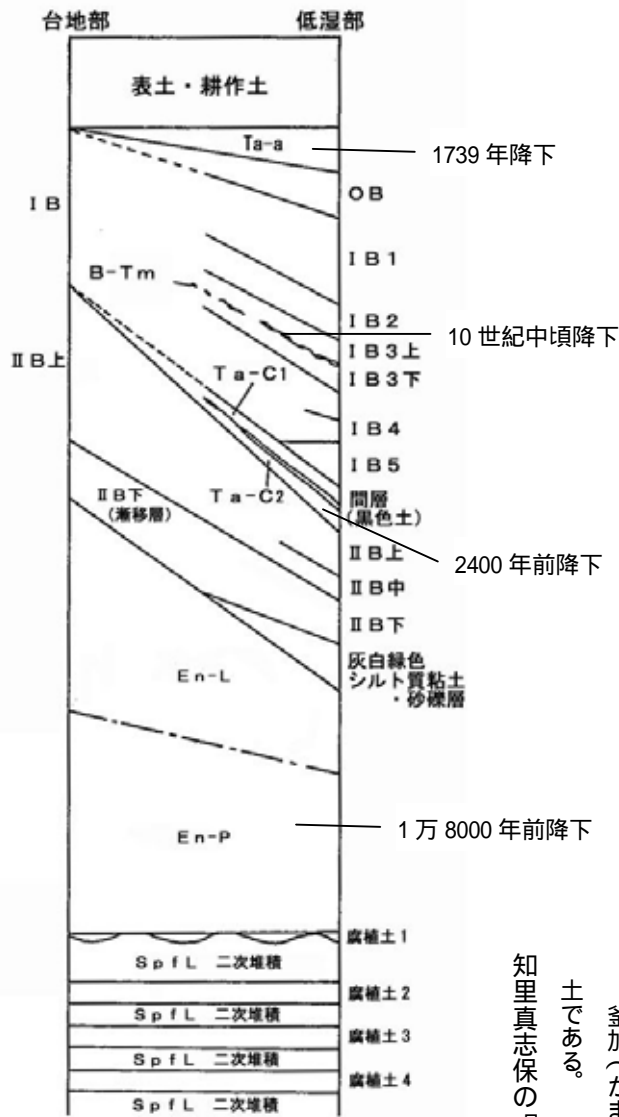


図-5 ユカンボシC15遺跡の土層模式

永田方正の『北海道蝦夷語地名解』（明治二十四年初版、昭和五十九年復刻）は、「カマ」に関連する地名について、「胆振国千歳郡」の項で次のように説明している。

Kama pa カマ パ 扁磐の頭 扁磐ノ東トモ  
 Kama kotan カマカコタン 磐上（イワカミ）村

知里真志保の『地名アイヌ語小辞典』（昭和三十一年）には次のような説明がある。

Kama カマ 平岩 扁磐（「ナ三口」岩）  
 Kama so カマソ 平岩 海中の平岩（「平たい・岩」）  
 Kama ya カマヤ 扁磐の岸。

ツタロ式では外側への張り出しが顕著であり、中茶路式では外側への張り出しはほとんど見られない。

三・ユカンボシC15遺跡の発掘調査

ユカンボシC15遺跡は高速道路建設に伴って発掘調査が行われた。平成八年から三カ年にわたる調査内容は、六冊の報告書として刊行されている。東西の長さ三〇〇mほどの調査範囲の中ほどには自然河川としてのユカンボシ川が横切っており、低湿部をなしていた。

台地部および低湿部についての土層の堆積状況は、図5の模式図に示した。前述したように、発掘調査における遺構、遺物の観察記録から、水位

の上昇は、この一〇〇〇年間ほどの出来事である（前掲、西田二〇〇六）。さらに擦文文化期の終末八〇〇年前）であつても水位は八m以下であり、アイヌ文化期になると船の航行ができるほどに水位が上昇していることも述べた。

四・アイヌ語地名カマカの「カマ」について

現在「かまか」の地名は、長都大橋よりも下流、千歳川から西側の地域を称しており、漢字で「釜加」と表示されることが多い。これがアイヌ語地名であることは、一八世紀末以降の諸記録が示すところである（図6）。以下、「かまか」に関連する記述をみていく。

『増補千歳市史』（昭和五十八年）では次のようになっている。

釜加（かまか）kama ukka（平岩の・瀨）この平岩は岩石ではなく堅い重粘土である。

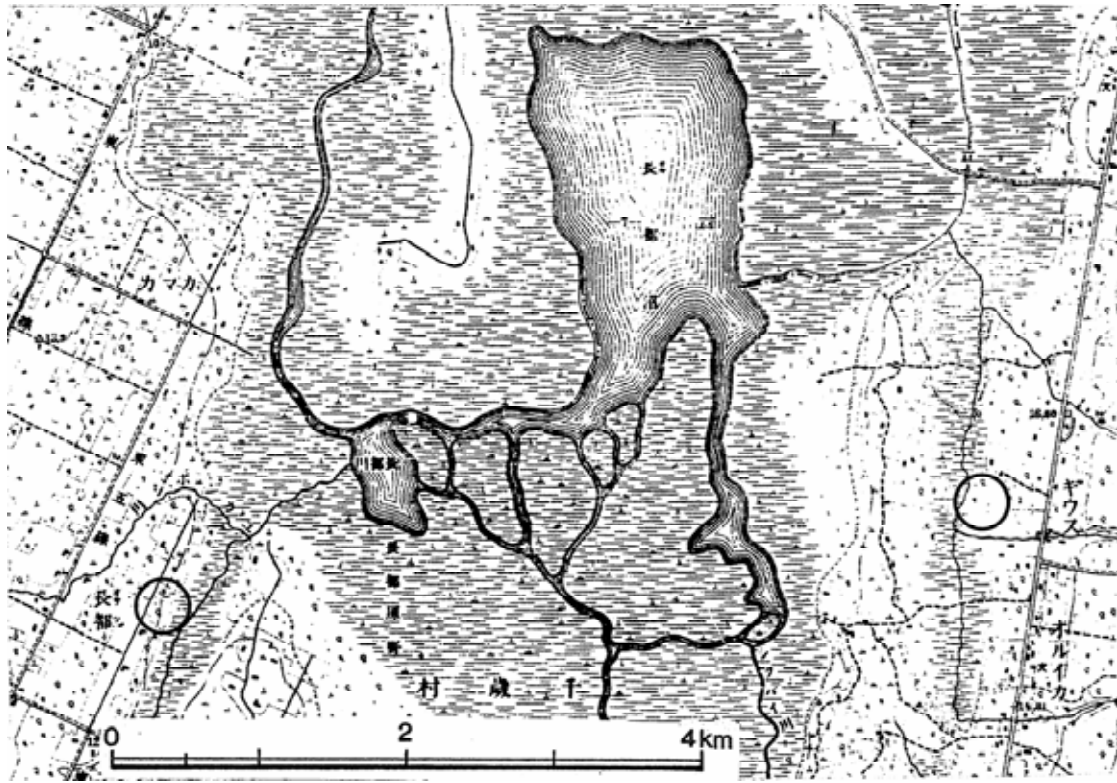


図-6 改修前の長都沼と地名「カマカ」、遺跡の位置 印左：ユカンボシC 2遺跡、右：キウス4遺跡A地区  
 (この図は、大正9年「大日本帝国陸地測量部」発行の5万分の1地形図「漁」の一部である)

Kama Keshi カマ ケシ 扁磐ノ下

この永田の地名解には、道内の「カマ」に関連する地名が、「カマ」を最初にもつものだけでもこのほか一五カ所みられるが、それらの「カマ」は「磐」「扁磐」「平磐」と訳されている。

以上にみるようにアイヌ語地名「カマ」は、「平岩」「平磐」「平盤」を意味している。

ところが、千歳市内の釜加地域では、「カマ」地名のもととなったであろう「平岩」「平磐」を見つけないことはできない。なぜならば、かつてのオサツ沼の周辺の地形は、支笏火砕流堆積物(火山灰)を基盤とする低平な地形であり、岩礫類は存在しないのである。そうであるならば『増補千歳市史』に記してあるように「岩石ではなく、堅い土が見出せるのだろうか」。

平成九(一九九七)年、同十年のユカンボシC 15遺跡の発掘は、近世アイヌ文化期(三〇〇年前)から旧石器時代(二万年前)までにおよぶ多くの人間生活の痕跡を調査することとなった。発掘調査の二カ年とも「恵庭a 降下軽石層」(ENP)を部分的に掘り抜いた。一万八〇〇〇年前の降下と考えられる「恵庭a 降下軽石層」の最上部(厚さ一m)は、軽石混じりということもあって、きわめて堅硬な土層である。『増補千歳市史』の「かまか」に書いてある「重粘土」は、この「恵庭a 降下軽石層」のことであろうかという見解にいたった。

発掘においては調査地点周辺の野外探索は重要なので、折にふれてユカンボシ、長都、釜加地区において農地や道路工事の断面、河川の底の観察に努めた。すると、土層の堆積状況や土質の特色から判断して、「かま」土層とみなせる「恵庭a 降下軽石層」が現地表の二、三m下に表出しているところを見出した。この低平な地域では傾斜が緩慢なので、堅硬な土層は、河川の流水によっては消失しないのである。

二〇世紀後半に千歳川の改修が行われ、流路の掘削・直線化がなされる前は、この川を舟で上下する人々には、川底の硬さが大変印象に残るものであったのであろう。オサツ沼に代表される沼沢地であるにもかかわらず、棹さして自在に進めたのであれば、漢字で「磐」「盤」と記されるほどのものと認識されたことになる。

現在、「恵庭 a 降下軽石層」の露頭が容易に観察できるのは、直線化された長都川と流路の改修がなされたユカンボシ川に合流点付近であり、ユカンボシC1遺跡と呼ばれている微高地のあたりである。

おわりに

かつてのオサツ沼で代表される低湿地の環境は、擦文時代以降のことである。つまり縄文時代早期後葉（六五〇〇年前）以降擦文文化期に至るまで、この地域の大部分は乾いた地（湿地でないという意味）であり、集落が形成されうる環境なので、泥炭層の下に集落が埋まっている可能性が指摘できる。

低湿地としての環境をもたらしたものは、一般論として、流入水量の増大、排出部分の停滞（排水の不調）が想定される。具体的には夕張川水系の流路変更による流入増加、石狩川と江別川（千歳川）の合流部の変更に伴う流下水位の上昇などがあるが、時間軸を加えて論じる資料の持ち合わせはない。あるいは千歳地域の局地的な沈降も考慮すべきであろうか。

引用・参考文献

遠藤香澄 平成九（一九九七）年 「縄文時代早期の土器」『美々・美沢』

（財）北海道埋蔵文化財センター

西田茂 平成十八（二〇〇六）年 「石狩低地帯南部における遺跡の形成と水位の

変動」『北海道考古学』第四一輯

（財）北海道埋蔵文化財センター 平成六（一九九四）年 『千歳市ユカンボシC2

遺跡』北埋調報八六

平成十（一九九八）年 『千歳市キウス4遺跡

（3）』北埋調報一三四

『千歳市キウス4遺跡

（4）』北埋調報一三五

平成十五（二〇〇三）年 『千歳市キウス4遺跡

（10）』北埋調報一八七

『千歳市ユカンボシ

C15遺跡（6）』北

埋調報一九二

平成十六（二〇〇四）年 『遺跡が語る北海道の

歴史』二五周年記念誌